関連学会印象記

第2回心不全学会学術集会

松森 昭*，尾野 亘*

1998年10月15－17日，紅葉の札幌で，第2回心不全学会学術集会が，北畠顯北海道大学医学部循環器内科教授を会長として開催された．季節はずれの台風が日本に上陸していたが，参加者は1040人を数え，第1回学術集会と同様に盛況であった．この会の発展とともに今後の心不全の研究が推進されるものと考えられる．

心不全は，世界各国で大きな問題として取り上げられており，昨年の5月のヨーロッパ，9月のアメリカの学術集会に次いで我が国でも10月に第1回学術集会が開催された．欧州における本年の動向としては，6月25日から27日にかけてスコットランドカンファレンスセンターにおいてHeart Failure Update '98が開催された．本来，ヨーロッパ心不全研究会は2年ごとに開催されることになっているが，特別にUpdateとして開催されており，関心の高さを示している．また，米国においては9月13日から16日にかけて第2回学術集会が開催された．

本学会においては，特別講演は3題がとりあげられた．M. Konstam博士（Tufts大学）の講演（New Consepts of Clinical Practice Guidelines for Heart Failure）では，従来の心不全治療のガイドラインに対し，特に抗凝固療法とβ受容体遮断薬治療において新しい指針が示された．さらにアミオダロンや植え込み型除細動器の効果に関しては今後の検討の必要な領域であると述べられた．またL. Leinwand博士（Colorado大学）の講演（Future Considerations and Prospects of Heart Failure Research）ではヒトの肥大型心筋症の原因遺伝子の一つと考えられる心筋トロポニンT遺伝子異常について，遺伝子過剰発現マウスを用いて検討した結果を示した．従来のミオシン重鎖遺伝子異常に関する報告との違いとしては，遺伝子変異の結果，短い心筋トロポニンTが発現するようなマウスにおいては心筋細胞が小さくなるということであった．ヒトでは肥大を引き起こす異常が，このような逆の結果を生むことに関しては更なる検討が必要と考えられた．さらに松尾壽之博士（国立循環器病センター）はRecent Progress in the Natriuretic Hormone Researchという演題で，近年大きく発展をとげたナトリウム利尿ペプチドに関する最近の話題について，特に心不全との関与について語られた．

また，プレナリーセッションは4題（Beyond ACE Inhibitors, Heart Failure and Cardiac Sudden Death, Gene Therapy for Heart Failure: Current Status and Future Prospects, New Insights in Pathophysiology of Heart Failure），モーニングレクチャーは3題（Basic Science for the Clinical Investigation, Cardioprotection from Ischemic Heart Failure, A New Paradigm beyond Cardiac Transplantation），サテライトシンポジウムは3題（New Paradigm in the Treatment of Heart Failure, A-Ⅱ Antagonism: An Emerging Therapy for Congestive Heart Failure, Current Strategy for Treatment of Congestive Heart Failure），ランチョンセミナーは3題（Role of Amiodarone for Heart Failure Therapy, Ca^{2+} Sensitizer, Management of Heart Failure Update）あり，このなかで米国からの演者は11名，欧州からは4名であり，日米欧の協力のもとに心不全学が発展していくものと思われた．同時通訳は英語→日本語，日本語→英語の双方向においてなされ，活発なディスカッションを助けていた．

一般演題としてはポスタープレゼンテーションとして206題が発表された．どのブースにおいて

*京都大学医学研究科循環病態学

Presented by Medical*Online

もあふれるほどの参加者を集め，熱気のこもった討論が繰り広げられていた．演題のなかで24題はYoung Investigator Awards候補演題として選ばれ，最優秀賞は岐阜大学の西垣和彦氏（High Plasma Soluble Fas, an Inhibitor of Apoptosis, Definitely Improves Prognosis of Patients with Severe Chronic Heart Failure）に贈られた．同氏はアポートシスの阻害効果を示すと考えられるsoluble Fasが高い群において心不全の予後が良いという新しい知見を示した．また，優秀賞には九州大学医学部循環器内科の重松秀明氏（Endogenous Angiotensin in the Nucleus Tractus Solitarii Is Involeved in the Increased Synpathetic Nerve Activity in the Rats with Heart Failure via AT 1 Receptors）と京都大学循環病態学の尾野亘（NF-κB Activation and Enhanced Cytokine Gene Expression Occurs in the Non-infarcted Myocardium of Rat Hearts）に贈られた．

心不全は先進国では医療上の大きな問題となっており，早急にその対策が求められている．心不全は，神経体液系，内分泌系，および免疫系の異常を伴う複雑な症候群である．心不全に関して，最近分子生物学的な技術の進歩がもたらした新しい知見だけでなく，多くの側面が明らかにされてきたが，なお未解決の問題があまりにも多く残されている．このような状況下に，心不全に関して臨床的および基礎研究両面で，さらに充実した研究を推進することが必要であり，そのための新しい活動として，本学会がますます発展していくことを念じている．

第3回心不全学会学術集会は，竹下彰九州大学医学部循環器内科教授を会長として開催される予定である．さらに，第4回会長として横山光宏神戸大学医学部第一内科教授が選ばれた．

Presented by Medical*Online